

2009 年度開発輸入企画実証事業実施報告書（要旨）
「ウガンダ産オーガニックコットンとコットン精練用シアバター石けん」
（事業主：株式会社 スマイリーアース）

1. 事業概要

1.1 事業目的

日本のオーガニックコットン市場は、消費者の安心・安全意識の高まりにより拡大しつつある。日本市場では、米国産のオーガニックコットンが主流で、最近ではアジア産も増えつつあり、アフリカからはタンザニア産のものが輸入されているとみられる。本事業主（スマイリーアース）は、2007 年から、ウガンダ産 100%のオーガニックコットン糸を輸入し、日本でオーガニックコットン 100%のタオルを製造している。

本事業では、より付加価値の高いリネン類（シーツ・ケット・カバー）を製造するための微細糸の開発輸入、またコットン精練に使用するシアバター石けんの開発輸入、さらに現地製造のオーガニックコットンTシャツを輸入販売し、日本市場における「ウガンダ産」オーガニックコットンのプレゼンスを高めることを試みた。

1.2 実証項目

(1) 従来品のオーガニックコットンタオルではなく、より付加価値の高いオーガニックリネン類（シーツ・ケット・カバー等）の製造を目指し、オーガニック微細糸の開発輸入とその綿糸を使用したリネン類の生産が可能かを実証する。

(2) コットン精練過程で使用するシアバター石けんの製作を目指し、工場で使用する石けんの現地での製作可否、同石けんでのコットン精練可否を実証する。

(3) 現地で製造されたオーガニックコットンTシャツの輸入を目指し、現地企業と協力し縫製、デザイン、プリント、を行った上で日本市場へ導入が可能かを実証する。

(4) 以上のことを通じて、「ウガンダ産」オーガニックコットンが日本市場で一定のプレゼンスをもつ可能性を実証する。

1.3 背景(2009 年度開発輸入企画実証事業実施に至った背景)

伝統的な綿花生産には全世界で生産されている殺虫剤の 25%を消費し、地球全体で生産されている農薬の 10%以上を使っていることが知られている。近年、消費者の間で健康・安全への意識や配慮、環境に対する責任意識が増す中、この伝統的な綿花生産の拡大の可能性は徐々に狭くなってきている。一方で、先進国では綿花農家に多額の援助金が提供され続けており、このことにより世界の価格決定プロセスが歪められ、結果としてウガンダ

などの発展途上国は不公平な取引(=アンフェアトレード)を強いられる状況が続いてきた。このような状況に対しウガンダ政府は、綿花に対して付加価値を付けることにより公平な取引が可能になるとの考えから、オーガニック認証を取得することを生産者に推奨している。現在、ウガンダ政府が中心となり、ウガンダを本物のオーガニックコットンの主要な供給地とするための取り組みが行われている。このような中、スマイリーアースは、現地での綿花生産活動を持続的に支援する手段として、現地生産者やコットン生産に携わる人達の現状を理解した上で、現地で手摘みされたオーガニックコットンを現地ウガンダの紡績会社で加工したオーガニックコットン糸を輸入している。日本国内において唯一、オーガニックコットンのみを加工して製品に仕上げる全工程自社工場内一貫生産の物づくりを行っている。

今回の実証事業では、ウガンダ産のオーガニックコットンの良さを追求し製品として完成させること、ウガンダ産のシアバターを精練用石けんとして開発すること、当社独自の低温精練技術を高め、より安心と安全を重視した物づくりに発展させていくことを目指す。これにより、日本国内ウガンダ産オーガニックコットンの良さが理解され、広くウガンダをアピールすることが出来ると考えている。さらに、ウガンダで製造されるオーガニックコットンTシャツの縫製、デザイン、プリントについて現地企業と試行錯誤を行い、日本への輸入販売を増やすことにより、日本人にその良さを知ってもらうことができると考えている。

2. 実証項目とスケジュール

(1) 実証事業スケジュール

2009年7月2日～10日：第1回現地訪問

- ①□フェニックス社にて微細糸の生産が可能か確認した
- ②シアバター生産地リラにてシアバター石けんを現地にて製作可能か検証した
- ③フェニックス社にてTシャツの縫製、デザイン、プリントについて情報交換

2009年7月

- ①ウガンダで開発された糸を利用し、日本において付加価値の高いリネン類の生産可能であるかを実証していく準備を進めた
- ②現地フェニックス社製Tシャツの販売とデザインの企画提案についての協力を模索するためNPOなどに営業活動を行った
- ③現地より取り寄せたシアバター石けんの品質不良(鹼化度)の調査

2009年8月

- ①フェニックス社より取り寄せた微細糸を使用しリネン類を随時作成

②現地より取り寄せたシアバターで石けんを試作し精練に使用

2009年9月9日～17日：第2回現地訪問

①取り寄せたシアバター石けんの専門家による分析結果の報告と改善の可否を探った

②綿畑の視察

③輸入したオーガニック極細糸の仕様変更を依頼

④Tシャツの問題点を確認

2009年9月

①Tシャツについてデザイナーと現地作製の規格パターンやサイズのチェック・技術的問題について検討

2009年10月

①織り付け段階で生じた問題の早期解決を探り、改善を行った

②Tシャツの型紙パターンサイズとプリント案を決定

2009年11月

①Tシャツのサイズ別サンプルの受け入れ、プリントの依頼

2009年12月8日～14日：第3回現地訪問

①Tシャツプリント型のチェックと色出しに立ち会う、サンプル確認と発注

②シアバター仕入れ先の決定とグル地区訪問

③フェニックス社において工場長へ新規の提案を行った

2009年12月

①織り上がった生地サイズの調整と顧客への提案の仕方を検討

②広報パンフレットの作成準備

2010年1月

①広報パンフレットの作成及び納品

②現地よりサンプルTシャツの受け入れ

3. 検証方法と結果と考察（課題とそれらをクリアするための対策や提案）

1. 検証方法

(1)実証項目①検証方法：現地紡績会社フェニックス社に、これまでの糸より細い50Sと40Sという撚係数にしたサンプル糸作成を依頼し、その「撚り」の強度の特徴を生かした幅広生地の物づくりが可能であるかを検証した。

(2)実証項目②検証方法：シアバター石けんのサンプルを現地より持ち帰り専門家に検査を依頼し、検証した。また、自社工場で実際に低温精練用に製造、使用し、その効果を調べた。

(3)実証項目③検証方法：現地フェニックス社製Tシャツの製造現場を訪問。サンプルを入手し、その縫製、デザイン、プリントの仕様について依頼を行った。

2. 結果・考察・課題

(1)実証項目①結果及び課題：

オーガニックコットン糸の強度が経糸密度の違いで変化することが、検証を重ねた結果見えてきた。

また、オーガニックコットン糸を、糸の伸縮効果で生地に変化を持たせ多様化できるように製織方法をオリジナルで工夫し、ナチュラルカラーベース(染色を施さない)のみでの表現に徹した結果、デザイン性のある良い物づくりができた。

この実証期間中にも100%オーガニックのリネンに興味を持ち、購入して頂いた化粧品メーカーがあった。このような企業をどうやって見つけていくかが今後の課題となる。

(2)実証項目②結果及び課題：

まずは、現地での製作を試みるべく、現地訪問時にCCI社より入手したサンプル石けんを持ち帰り、日本国内においてその検査を行った結果、鹼化率が悪く石けんとしての機能は無いという結果が出た。そのため、同時に輸入していたシアバターを使用して精練用石けんとして自社内で作ることにした。試験を繰り返し行いシアバター100%の無添加石けんを完成させることに成功。この自家製シアバター石けんを使用しての精練に取り組んだ結果、ウガンダのオーガニックコットンの良さを最大限に生かした低温による精練が可能になった。低温精練は、通常の高温での精練とは違い、エネルギー消費量が著しく低くエコである上、コットンの組織を破壊することもないためメリットが大きい精練方法である。その後、ウガンダにおいて自社工場で作った石けんと同じものを製造してもらうべく指導を行ったが、水が違うこと、現地生産者のスキルの問題、工場内設備の問題等から成功には至らず、当面はウガンダのシアバターを使って自社で製造したシアバター石けんを使用することとした。

(3)実証項目③結果及び課題：

フェニックス社製Tシャツのサンプルのチェックを行った結果、フェニックス社製Tシャツはウガンダ国内向けでサイズ及び形状が日本市場には合わないことが明らかになった。このため、型紙サイズデータとプリント型を日本国内で作成することとした。

4. 今後の事業展開

今回、開発輸入企画実証事業を行ったことで、スマイリーアースの目指していた、現地ウガンダ産オーガニックコットンをウガンダ産シアバターから出来たシアバター石けんを使用して精練加工することが可能であることを実証することが出来た。これによってストーリー性のある商品作りを確立することが出来た。今後の事業展開としての大きな課題は、今回の実証で得た知識を日本の繊維業界に止まらず、広範囲へ発信し、共感を得て広げて行き、現地ウガンダにおいて現地の人たちの手により「ウガンダ産オーガニックコットンをウガンダ産シアバターで精練加工し製品に仕上げる」というオリジナルな物づくりを可能にしていくことである。また現地の紡績工場であるフェニックス社で製造したTシャツを日本国内に広く発信し、販売していきたいと考えている。

またウガンダのオーガニックコットン糸については、強度の限界とその多様性を理解できた事により、より高いレベルのオリジナリティを持つ物づくりを進めていくことが次の課題として見えてきた。

以上